

説教要旨 「死は勝利に飲み込まれた」

コリントの信徒への手紙Ⅰ 15章50～58節



伝道者パウロは二回目の伝道旅行の際に、コリントの町に教会を建てました。コリントの町を離れたパウロにコリント教会の現状を伝えられ、パウロはいてもたってもいられず筆をとってしたためたのがこのコリントの信徒への手紙です。パウロが伝え聞いたコリント教会の現状。それは、コリントの信徒たちが教会の指導者の名前によって派閥をつくって対立していたというものです。福音とは、イエス・キリストの十字架に示された神の愛です。しかし、福音がいくつもあるかのように派閥をつくり、互いの正しさを振りかざして対立しあっているのです。そのようなコリントの信徒たちへパウロは「あなたがたはキリストによって一つとされたのではなかったか」と訴えかけるのです。

そして、この15章では復活について語ります。それは「あなたがたの中のある者が、死者の復活などない。と言って」(15:12) いるためです。

イエス・キリストは、私たちの罪を全て背負って、死ぬべき罪人である私たちの身代わりとして、十字架にかかって死んで下さいました。そのイエス様を、神様は復活させて下さいました。この復活を否定することは究極的な希望を捨て去ることだということです。

パウロの語る終末は希望に満ちています。復活の希望に生きる者は、この世における喜びや誉れや豊かさが過ぎゆくもの、朽ちていくものであること、そしてそれらが全て失われてもなお、神の恵みが自分を捕えていることを信じて生きることができるのです。復活の希望に生きる者は、この世の人生における苦しみ、不幸、不遇に捕われることもなくなるのです。しかし、この世の人生が全てだと考えている者には、苦しみ、不幸、不遇は人生の敗北、失敗を意味します。そこには絶望しか生まれません。しかし復活の希望を与えられているなら、この世の人生における苦しみや不幸が、人生の価値を決める決定的な事柄ではなくなるのです。



(2019・11・3 説教者：稲垣真実)